

メガ都市における居住環境の歴史的変容とその今日的動態

先のパネルでは自然生態に着目して地球全体に存在する17のメガ都市の特徴を分析し比較した。このパネルでは、その中から代表的な5つのメガ都市をとりあげて、各都市を構成する様々な居住環境とそれらの空間的範囲や分布、拡張、再編の歴史的展開に着目し、それぞれの都市の成り立ちと今日的動態について考察する。

ここで取り上げるジャカルタ、上海、ムンバイ、カイロ、ニューヨークは、気候上の分類では、亜寒帯湿潤(および温帯湿潤)(ニューヨーク)、温帯湿潤(上海)、温暖砂漠(カイロ)、熱帯湿潤(ジャカルタ)、熱帯サバナ(乾燥)(ムンバイ)という主要な区分を代表する事例である。また、地域的には東南アジア(ジャカルタ)、東アジア(上海)、南アジア(ムンバイ)、西アジア(カイロ)、アメリカ・ヨーロッパ(ニューヨーク)、を代表している。

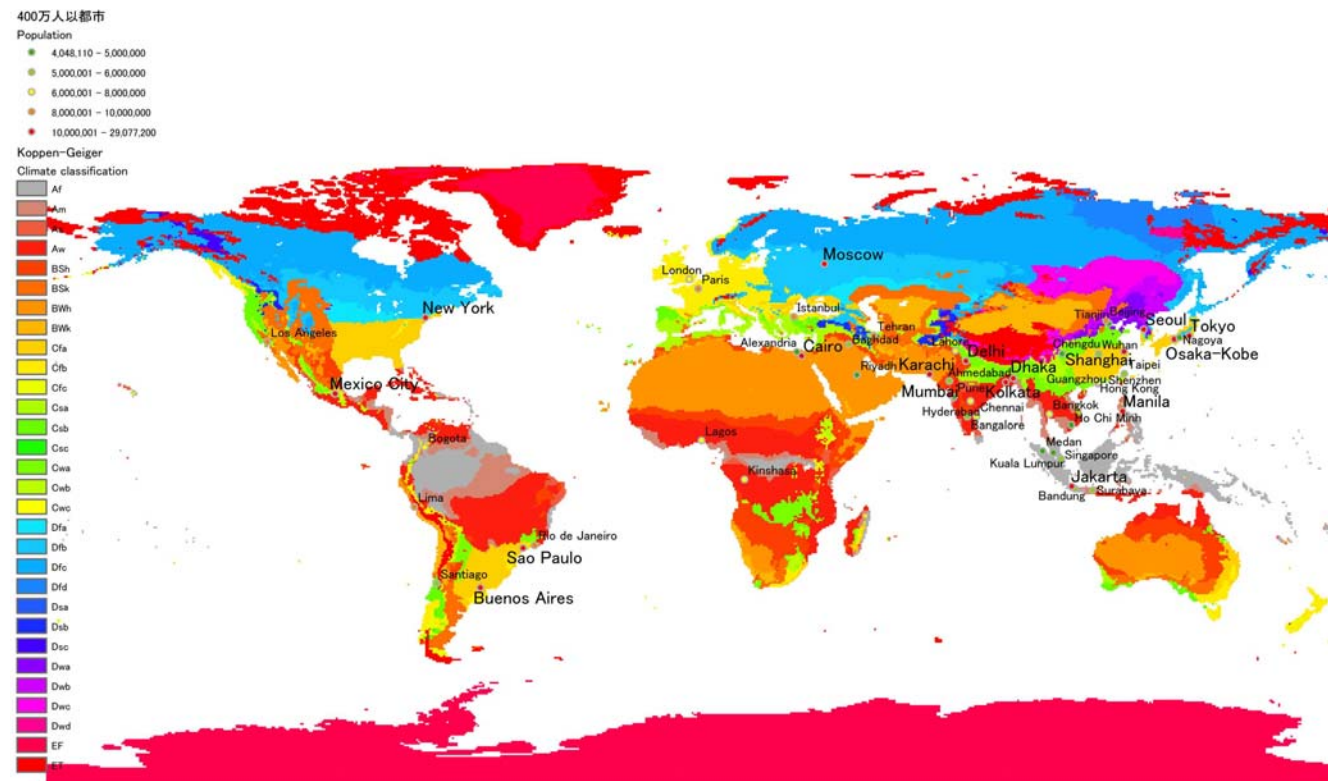
都市には様々な人々が生活し、その日常的活動をつうじて生まれる様々な居住環境がある。都市はその複合として眺めることができる。居住環境とは、生活の主要な場となる住宅を中心としつつ、その配置や敷地割、道路、土地、自然生態などの組み合わせとして成立している物理的環境のことである。それぞれの居住環境は人々の生活とのかかわりをつうじて存在しており、「下町」や「郊外」、「団地」など、そこで生活する人であれば容易にイメージできるものである。

居住環境は、形や配置、密度、規模、素材など、そこにおける物理的環境の様々な要素によって構成される。そのうちの何が重要であるかは、時代や地域、人々によって異なる。居住環境の類型化にあたっては、日常生活の複雑さを反映するこれらの要素の組合せを総合的に判断している。同時に、居住環境の都市全体の構成を概括するために、その主要構成要素である住宅の高さと密度に着目し、数量的観点から複数の居住環境をより大きなまとまり(居住環境の主要なまとまり)として捉える。

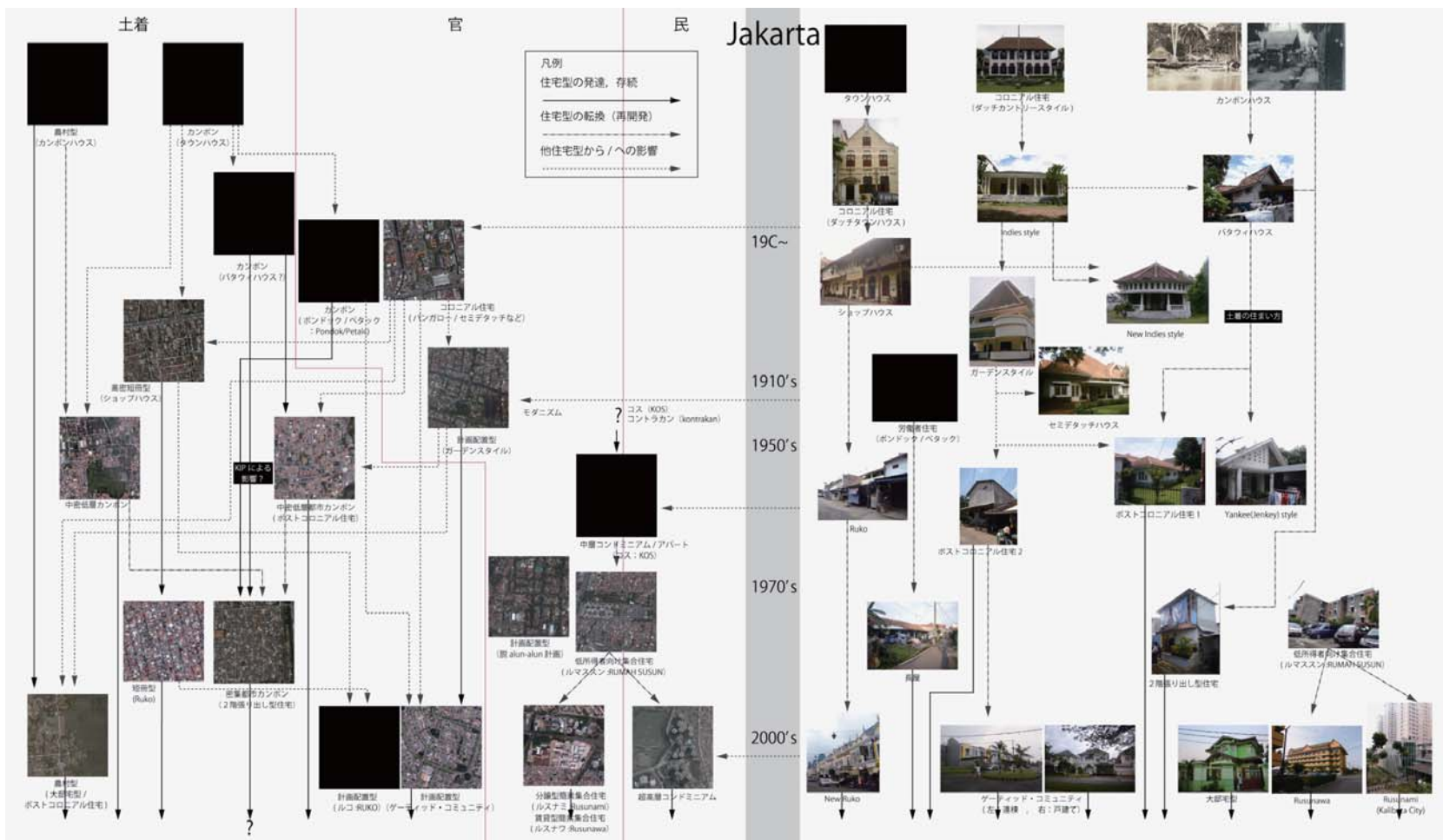
各メガ都市の解説はこの2つの視点を組みあわせ、①居住環境類型の歴史的展開をあらわす「居住環境系統図」と、②その歴史的文脈を記した「年表」、および③そうした経緯を反映して今日成立している「居住環境の主要なまとまりの代表的景観」と、④都市における「居住環境の主要なまとまりの空間分布図」、の4つの図表をつうじてその歴史的形成と現在を描いている。

それぞれのメガ都市は、そこでの居住経験を有する研究者あるいはそこを長年フィールドとしてきた研究者が担当している。Google Earthの衛星画像や街路の写真を用いてバーチャル悉皆調査をおこない、市街地で一定の範囲で共通に見られる物理的環境を主要な居住環境の型として括りだし、類型化した。加えて、類型の時系列に沿った展開の把握に、それぞれのメガ都市の住宅史をはじめとする歴史研究の成果を参照した。

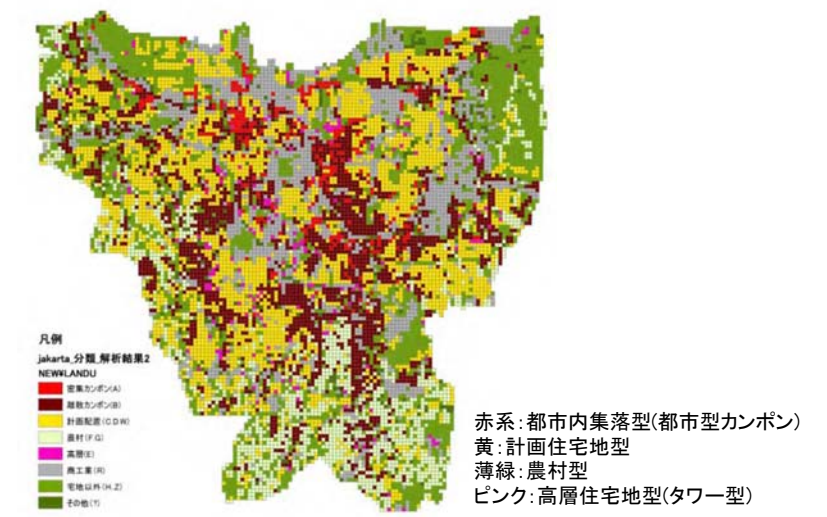
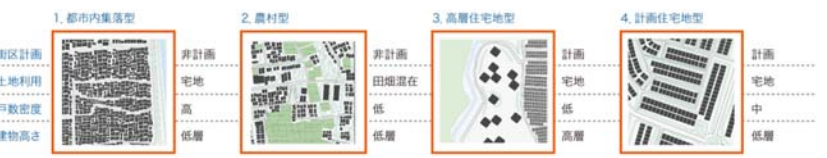
ここで描かれた各都市の固有の展開に加えて、それぞれの都市を比較しながら眺めることで、都市間の居住環境の共有関係や、同時代的関連性とその全球的展開についても見通しを得ることができると期待している。



Jakarta



1527年 港町スダクラバ
1527年ー バンテン王国がスダクラバを占領し、ジャヤカルタと名付ける
1619年 オランダ東インド会社がチリウ川東岸に商館、要塞と居住地を建設し、ジャヤカルタはバタヴィアと改名された。香辛料を主要商品とする東インド貿易の中心となる。
1629年 チリウ川西岸へ市街地が拡張する。東岸とともに市域が城壁で囲まれる。
城壁内における計画型居住地の形成
城壁で囲まれた市域外に居住地(カンボン)が形成される。
1750年代ー 郊外での私領地(荘園)開発、内陸輸送用運河の開削がおこなわれる。
バタヴィアは貿易港から植民地経営の中心都市へ転換する。郊外における邸宅の発展、メスティソ(混血)文化の発達
市域からの人口転出
1795年 フランス革命の余波でオランダがフランス軍に占領される。
1799年 オランダ東インド会社の解散。ジャワ島はオランダの直轄植民地となる。
1808年 南部に新市街ウェルトフレーデンが建設され、市域が拡大する。新市街にハンガロタイプ計画型住宅地が新たに形成されはじめる。一方、市域の周辺部では19世紀をつうじて人口増加が進行した。
メスティソ文化批判、ヨーロッパ優越意識の波及
1811年ー1815年 イギリス東インド会社がバタヴィアを占領する。フランスがオランダの海外植民地を接収することを恐れたイギリスによって、旧オランダ東インド会社の拠点のほとんどが占領された。
1900年ー 首都機能の分散(オランダ本国からのモデル導入)行政中心である総督府が南部の避暑地バインテンゾルフ(ポゴール)へ移転する。
旧城壁内は金融機関、貿易商社が建設され、商業センターとなる。外国領事館もまた旧城壁内に建設された。
1913年 メンテン居住区の建設
田園都市モデルの計画型住宅地の形成がはじまる。
オランダ文化とメスティソ文化との空間的分離の進行。
メスティソ文化のインドネシア文化への変容
1920年代 バンドン、グヌンサハリ、モーレンフリートへの諸官庁の移転
1942年 日本軍がオランダ領東インドを占領する。バタヴィアはジャカルタと改名される。
1945年 第二次世界大戦終結、インドネシア独立戦争(1949年)
1948年 市街南郊に田園都市クハヨラン・バル建設
1949年 インドネシア連邦共和国発足
1950年 インドネシア共和国発足
1950年ー インドネシア共和国首都ジャカルタの成立
首都機能の再集中と農村部からの人口流入
市街地内のカンボンが人口流入で高密度化し、都市型カンボンが形成される。
1967年 都市空間秩序総合計画1965-1985
1967年 ASEAN発足
1968年 スハルト大統領就任
1969年 カンボン改善プログラム開始
1973年 住宅公社と住宅ローン体制の構築、日本からの専門家派遣
高所得層向け住宅開発の開始
都市周辺のカンボン(農村型カンボン)が市街地に取りこまれて高密度化し、都市型カンボンが形成される。
新市街における計画型居住地の拡大、農村型カンボンの混在
ジャカルタ広域都市圏構想=ジャボデタベック構想
ジャカルタへの人口集中の抑制を意図した、周辺地域を含めた広域の構想
1980年代ー 大規模工業団地建設、道路網整備の継続
既存の集落から発達した市街(デサコタ)が連続的に接続した巨大な市街化地域(メガアバーンリジョン)の形成
1998年 ジャカルタ暴動
スハルト大統領辞任、民主化、分権化の実施
2000年代 高層集合住宅(アパート)の建設増加
2004年 スマトラ沖地震
2011年 住宅法2011年1号
2012年 ジョコウィ、ジャカルタ特別州知事就任



17世紀まで、ジャカルタはスダクラバ、後にはジャヤカルタという名の港町として知られていた。1619年にオランダ東インド会社VOCが活動の拠点としたことからバタヴィアと呼ばれる東インドにおける主要な貿易港の1つとなり、城壁で囲まれた市域が建設された。
18世紀中頃からはバタヴィア周辺などジャワ島の開発がおこなわれ、コーヒーなどのプランテーション産品がVOCの主要収入源となった。バタヴィアは周辺の土地に私領地(荘園)が形成され、内陸部との接続が強化されて植民地経営の中心として重要となった。市域における同時期のマリアの流行とあいまって、19世紀初頭に内陸のウェルトフレーデンに新たな行政中心が建設された。建設には城壁内の建物を解体して得た資材が充てられた。
1830年からの強制栽培制度、1870年代の鉄道敷設、港湾整備をつうじて19世紀をつうじてバタヴィアはプランテーション産品の集荷と貿易の独占的中心となり、20世紀に入ると既存の行政中心に加えて旧市域に商業中心、内陸に郊外住宅地が整備された。
第二次世界大戦の閉戦と1942年の日本軍による占領を挟んで1950年にインドネシア共和国が発足し、首都となったジャカルタに農村からの人口流入が集中することで都市部に高密度居住地(①都市型カンボン)が形成された。また市街地の周辺には農村(②農村型カンボン)が散在していた。とりわけ1970年代以降に高速道路網の整備とあわせて公共、民間による住宅地開発が進展し、③計画型居住地が郊外に拡大する。経済発展の著しい2000年代以降は新たに、④タワー型住居の建設が増加し、これらジャカルタの4つが主要な居住環境を形成している。